

2022 AC

1st. Celebrate Sukkot

原語で味わう創世記第1章

特別集中講座 10/9~16

10日(朝) No.2

「創世記第一章」を学ぶ上で大切な視点

【新改訳2017】

①ヨハネの福音書5章39節

あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。

その聖書は、わたしについて証ししているものです。

【新改訳2017】

②イザヤ書 46章10節

わたしは後のことを初めから告げ、まだなされていないことを昔から告げ、『わたしの計画は成就し、わたしの望むことをすべて成し遂げる』と言う。

※聖書のシナリオライターは時間と空間に支配されない永遠の神です。シナリオが歴史の中に突入する時、その初めと終わりが規定されることは当然のことです。

「創世記第一章」を学ぶ上で大切な視点

【新改訳2017】

③イザヤ書34章16節

【主】の書物を調べて読め。
これらのもののうち、どれも失われていない。
それぞれ自分の伴侶を欠くものはない。
それは、主の口がこれを命じ、
主の御霊がこれらを集めたからである。

※「自分の伴侶」にたとえられているのは、神のみことばの証言が必ず伴侶のように置かれているということの意味します。例えば、「千年」「十四万四千人」など。

「創世記第一章」を学ぶ上で大切な視点

●創世記1章に関する注解書は多く書かれていますが、その多くが宇宙(地球)の始まりと考えています。しかしアシュレークラスでは、創世記1章を「**神の永遠のご計画の全貌が啓示されている章**」という視点で学んで行きます。

【新改訳2017】ヘブル人への手紙 4章12節

神のことは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、**たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、心の思いやはかりごとを見分けることができます。**

●私たちが持っている「理解の型紙」(この世の知恵、常識、教理)という眼鏡を外して、霊を働かせることが不可欠です(Ⅱコリ5:16, 3:6)。私たちの霊の目が開かれるよう、シエーム・イエシュアの名を呼びつつ、学んで行きたいと思います。

1. 2節から始まる創造のわざの全体像 ①

● 1章1節を「**全聖書のタイトル**」とみなしました。神の創造のわざが始まるのは、2節からです。その全体像を概観してみましょう。

第一日	2～5 節	光	神は光を良しと見られた	夕があり、朝があった
第二日	6～8 節	大空(天)		夕があり、朝があった
第三日	9～10 節	地と海	神はそれを良しと見られた	
	11～13 節	植物	神はそれを良しと見られた	夕があり、朝があった
第四日	14～19 節	光る物(太陽・月・星)	神はそれを良しと見られた	夕があり、朝があった
第五日	20～23 節	水の中の生き物、 翼のある空の鳥	神はそれを良しと見られた	夕があり、朝があった
第六日	24～31 節	地の生き物 人と食物	神はそれを良しと見られた 見よ、それは非常に良かった	夕があり、朝があった

1. 2節から始まる創造のわざの全体像 ②

●表を通して分かる第一の特徴は、第一日から第六日までの日の終わりが、すべて「**夕があり、朝があった**」というフレーズで区切られていることです。2章1～3節に記されている「第七日」にはそれがありません。

●第二の特徴は、「**神はそれを良しと見られた**」というフレーズがあります。ところがなぜか、第二日だけは「良しと見られた」がないのです。それはどうしてなのでしょう。多くの方がそのことに気づきません。たとえ気がついたとしても、その意味が分からないのです。

●第二日に神の「良し」がないのは、その日には「**地**」(**その地**「ハーアールツ」אֶרֶץ)がないからです。そのことを知ることで、神の意図することが初めて見えて来るのです。つまり「その地」は、神にとって最大の関心の的だということです。

2. 2節のテキスト ①

- 今回は2節のみを取り上げます。

【新改訳2017】

地は茫漠として何もなく、闇が大水の面の上にあり、
神の霊がその水の面を動いていた。

テホーム ペネー アル ヴェホーシェフ ヴァーヴォーフ トーフ ハーイター ヴェハーアーレツ

וְהָאֵרֶץ וְהַיָּם וְהַיַּבֵּשׁ וְהַיָּבֵשׁ וְהַיָּבֵשׁ וְהַיָּבֵשׁ וְהַיָּבֵשׁ וְהַיָּבֵשׁ

ハツマーイム ペネー アル メラヘフェット エローヒーム ヴェルーアツハ

וְרוּחַ אֱלֹהִים מְרַחֶפֶת עַל־פְּנֵי הַמַּיִם׃

- 冒頭にある接続詞「ヴェ」(וְ)はどのように訳すべきでしょうか。

2. 2節のテキスト ②

● 「地」には冠詞がついており「その地」です。それは「天と地」である「その地」を意味しています。「その地」の状況を、「あった」を意味する「ハーヤー」(הָיָה)の女性完了形「ハーイター」(הָיְתָה)で表しています。「地」は女性形です。このことが重要なのです。「その地」の内容は以下の三つです。

(1) 「茫漠として何も無い」(תְּהוֹ וְבִהוּ) 聖書協会共同訳「混沌として」

(2) 「闇が大水の面のの上にある」(חֹשֶׁךְ עַל־פְּנֵי תְהוֹם)

(3) 「神の霊がその水の水の面(原文は「の上」)を動いていた。

(רוּחַ אֱלֹהִים מְרַחֶפֶת עַל־פְּנֵי הַמַּיִם)

●なぜ「天」からではなく、「地」から書き始めているのでしょうか。それは神の関心事であることと、「トーフー・ヴァーヴォーフー」から始まるのが「**神の創造のリズム**」だからです。闇から光へ、嘆きから賛美へ、苦難から安息へ、夕から朝へのリズム、このリズムが神の歴史(His story=History)を造って行きます。まさに、歴史は神のご計画における作業場と言えるのです。

3. 「茫漠として何も無い」 ①

● 「**茫漠として何も無い**」(聖書協会共同訳「**混沌として**」)という「トーフー・ヴァーヴォーフー」(𐤏𐤊𐤁𐤏𐤏𐤊)が何を意味しているのかを考えてみましょう。「トーフー」(𐤏𐤊𐤏)は旧約聖書で20回、「ヴォーフー」(𐤏𐤊𐤁)は3回使われています。しかし「トーフー・ヴァーヴォーフー」(𐤏𐤊𐤁𐤏𐤏𐤊)がセットで使われているのは、イザヤ書34章11節とエレミヤ書4章23節の2回のみです。

(1) 【新改訳2017】エレミヤ書4章23節

私が地を見ると、見よ、**茫漠として何もなく**、天を見ると、その光はなかった。

●エレミヤ書4章23節以降には、エレミヤが見た神の審判の幻による「北からの大いなる災い」の警告が、ユダに対して繰り返し語られます。それはバビロン捕囚となって実現します。主のさばきがものすごいスピードで押し寄せ、ユダの町々が荒らされ、エルサレムも包囲され、その結果として聖なる都の壊滅状態としての「トーフー・ヴァーヴォーフー」があります。ユダの民の悪のゆえに、神殿のある地が荒廃と混沌に帰す様をエレミヤは直視しています。

3. 「茫漠として何も無い」 ②

(2) 【新改訳2017】 イザヤ書 34章11節

ふくろうと針ねずみがそこをわがものとし、みみずくと鳥がそこに住む。
主はその上に**茫漠**の測り縄を張り、**空虚**の重りを下げる。

●イザヤ書34章は、諸国の民に対する神の究極的なさばきの宣告が語られています。その矢面にエドムが立たせられています。エドムはヤコブの兄エサウから出た氏族の総称ですが、11節は彼らに対するさばきの預言です。エドムはヤコブの子孫を憎み続け、その執念深い恨みには冷酷さがありました。

●詩篇137篇では、「主よ 思い出してください。エルサレムの日に、『破壊せよ 破壊せよ。その基までも』と言ったエドムの子らを」(7節)と祈っています。そのシオンの民の訴えに対して、復讐の時が来ることが預言されています。「エルサレムの日に」とは、エルサレムがバビロンのネブカデネザルによって破壊された日のことを指しています。その時にエドムはエルサレムを何度も略奪したのです。そのエドムに対する主のさばきが、イザヤ書34章9～15節に描写されているのです。同時にそれは、獣と呼ばれる反キリストによってもたらされる「終末の大患難」の状況をも預言しています。

4. 「闇」と「大水」

●さらに、エドムが永遠の廃墟となるところに、レビ記11章に見られる汚れた動植物が住むとされています。荒地に住む**汚れた動物**(鳥と獣)として「ふくろう、針ねずみ、みみずく、烏、ジャッカル、だちょう、山犬、野やぎ、夜の鳥、蛇、鳶」の名前が、**汚れた植物**としては「茨、いらくさ、あざみ」が挙げられています。そして動物の雄と雌がつがいで住むのです。これらすべてが、地における神のいのちが機能不全を起こしている状態を示しています。これが「闇」(「ホーシェフ」^{הוֹשֵׁף})の世界であり、死のイメージです。

●「闇が大水の面のの上にあった」とあります。「大水」と訳された「テホーム」(תְּהוֹמִים)は、地および地下だけでなく、天の上にもあります。ノアの洪水では天にある「大水」(=大いなる淵)の源(泉「メアヤーン」^{מַעְיָן})がことごとく裂け、天の水門(窓)が開かれ、雨が降ることで、地がさばかれています(創7:11, 8:2)。地は「闇が大水の面のの上にあった」とは、深遠な神の知恵と知識の**富**を意味する「**テホーム**」が闇で覆われてしまったことを啓示しているのです(ロマ11:33)。

5. 「メラヘフェット」①

● 「メラヘフェット」 (מֵלֶחֶפֶט) が「震える」を意味する「ラーハフ」 (רָחַף) の強意形ピエル態の分詞であることから、新改訳では「神の霊」が「その水」(「ハツマーイム」 מַיִם) の面を(「アル・ペネー」)「動いていた」と訳しています。その水の面を、鷺が巣のひなの上を舞いながら、その翼でおおっているというイメージ、つまり「**ホバリングしている**」イメージです。私は「メラヘフェット」をこのイメージで解釈しています。つまり、**神の霊が神の新しい創造のわざが始まることを予感させる動きをしている**ということなのです。

● 「水」は「神のことば」のメタファーです。「神のことば」を意味する水と神の霊がミングリングしていない状態、つまり混ざり合っていない状態です。

「水」は「マイム」 (מַיִם) で双数形です。それは「天の水」と「地の水」を指しています。「天の水」は「いのちの水」ですが、「地の水」は人間のからだ(肉体)・神殿を意味します。その地の水の面を聖霊なる神がホバリングしているというイメージなのです。

5. 「メラヘフエツト」②

●聖書の中で「水と霊」がセットで使われている箇所は多くはありませんが、イエシュアがパリサイ派のニコデモとの会話の中で、「人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることはできません。肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。」(ヨハネ3:5~6)とされました。ここでは「水と御霊によって」とありますが、ギリシア語原文では「水と御霊から(ἐκ)」となっています。ヘブル語訳も「ミン(מִן)」となっており、本来は「~から」と訳します。つまり、ここは「水と御霊から」と訳すべきです。日本語訳では口語訳と回復訳が「水と御霊から」と訳しています。そのように訳すことで、創世記1章2節とつながるのです。

●イエシュアは、「水と御霊」が創世記1章2節のホバリング状態からミングリングすることで人が新しく生まれる、そのことなしに神の国に入ることはできないと言ったのです。「肉によって(から)生まれた者は肉です。御霊によって(から)生まれた者は霊です。あなたがたは新しく生まれなければならない、とわたしが言ったことを不思議に思ってはなりません」(ヨハネ3:6~7)とされました。

5. 「メラヘフエツト」 ③

● 「人は、水と御霊によつてから生まれなければ、神の国に入ることはできません。肉によつてから生まれた者は肉です。御霊によつてから生まれた者は霊です。」(ヨハネ3:5~6)

● 「御霊から生まれた者は霊です」とあるのは、神のことばと神の霊がミングリングした状態を指しています。神の霊が (ホバリングしながら) 待っている状態から実際に働いて人(=地)が新しく生まれ変わることを、聖書では「新しい創造」と表現しています(ガラテヤ6:15)。イエシュアはニコデモに対して「あなたはイスラエルの教師なのに、そのことが分からないのですか」と言われました。イエシュアはここで創世記1章2節の話をしていたのです。そしてその後、「モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければなりません」と語って、ご自分が十字架にかけられる話(血)をされたのです(ヨハネ3:10~15)。

5. 「メラヘフエツト」④

●同じく、ヨハネはこうも言っています。

【新改訳2017】 I ヨハネの手紙5章1, 6~8節

- 1 イエスがキリストであると信じる者はみな、神から生まれたのです。
生んでくださった方を愛する者はみな、その方から生まれた者も愛します。
- 6 この方は、**水と血**によって来られた方、イエス・キリストです。水によるだけではなく、
水と血によって来られました。**御霊はこのことを証しする**方です。御霊は真理だからです。
- 7 三つのものが証しをします。
- 8 **御霊と水と血**です。**この三つは一致しています。**

●イエシュアが「水と血によって来られた」とは、私たちと同じように肉体をもって来られたことを意味しています。ここでの「水」はイエシュアの「からだ(肉体)」のことを意味していますが、同時に神のことば(神性)の「種」をも意味します。そして「血」はいのちを意味します。イエシュアは私たちの罪の身代わりとしてご自身の血を流され、復活によって贖いを成し遂げてくださいました。その方がメシアであると信じる者は、みな例外なく神から新しく生まれた者となります。そのことを私たち一人ひとりに個別的になしてくださる方こそ御霊なのです。**御霊と水と血の三つが新生の出来事を証ししているのです。**

5. 「メラヘフェット」⑤

● 今回の創世記1章2節がイスラエルの歴史において実際に体験されたものだとしたら、いったい聖書のどこにそれが記されていると思われますか。考えてみてください。

.....

● 「哀歌」(「エレミヤの哀歌」)を読まれたことはあるでしょうか。哀歌こそ、まさに創世記1章2節のすべての要素が含まれている唯一の書だと私は考えます。「哀歌」を知ること、創世記1章2節はイスラエルの民が経験した事実に基づいて記されたことが理解できるのです。

6. 「哀歌」の世界 ①

● 哀歌の冒頭は「ああ、なにゆえに」という意味の「エーハー」(אֲהָרָא)という語彙から始まります。哀歌のヘブル語の表題はこの「エーハー」なのです。これは2章の冒頭にもあります。「聖なる都エルサレムの荒廃」が歌われているのです。第1章の「エーハー」の嘆きは、神がその地に住もうとされたエルサレム(シオン)の「トーフー・ヴァーヴォーフー」、および「ホーシェフ」の状態に対してです。その荒涼とした惨めな姿が「慰める者はだれもない」(4回)というフレーズによって歌われています。第二章の「エーハー」では、なにゆえに破壊と破滅がもたらされたのか、その理由を歌っています。

● 1章、2章、4章は22節からなる「アーレフ・ベート」に基づく歌です。そして3章はその3倍に当たる66節からなっています。その3章の中の25～39節の部分(ו⇒נ)に「人称なき存在」の内なる声があります。それは神の民の霊に語りかけ、慰めと希望を与えてくれる声です。それはまさに創世記1章2節にある「神の霊がホバリングしている」かのようです。そこを特に取り上げてみたいと思います。

6. 「哀歌」の世界 ②

【新改訳2017】哀歌3章25～39節

- u 25 【主】はいつくしみ深い。主に望みを置く者、主を求めるたましいに。
 - u 26 【主】の救いを静まって待ち望むのは良い。
 - u 27 人が、若いときに、くびきを負うのは良い。
 - ・ 28 それを負わされたなら、ひとり静まって座っていよ。
 - ・ 29 口を土のちりにつけよ。もしかすると希望があるかもしれない。
 - ・ 30 自分を打つ者には頬を向け、十分に恥辱を受けよ。
 - o 31 主は、いつまでも見放してはおられない。
 - o 32 主は、たとえ悲しみを与えたとしても、その豊かな恵みによって、人をあわれまれる。
 - o 33 主が人の子らを、意味もなく、苦しめ悩ませることはない。
 - h 34 地上の捕らわれ人をみな足の下に踏みにじり、
 - h 35 人の権利を、いと高き方の前で曲げ、
 - h 36 訴訟で人を不当に扱うのを、主は見ておられないだろうか。
 - n 37 主が命じられたのでなければ、だれが語って、このようなことが起きたのか。
 - n 38 わざわいも幸いも、いと高き方の御口から出るのではないか。
 - n 39 生きている人間は、なぜ不平を言い続けるのか。自分自身の罪のゆえにか。
- この箇所は悲哀感が漂う哀歌の中で、唯一希望を抱かせるところです。

6. 「哀歌」の世界 ③

●【新改訳2017】哀歌3章25～29節

25 【主】は**いくしみ深い**。主に**望みを置く(待ち望む)**者、
主を**求める**たましいに。

26 【主】の救いを静まって**待ち望む**のは**良い**。

27 人が、若いときに、くびきを負うのは**良い**。

28 それを負わされたなら、ひとり**静まって**座っていよ。

29 口を土のちりにつけよ。もしかすると希望があるかもしれない。

なぜ、
主は**いくしみ深い**
(**良い**)のか。
トーヴ
ユハ

●「人称なき存在」のメッセージは、「主は**いくしみ深い**」(3:25)という一語に尽きます。ヘブル語では「トーヴ・アドナイ」(הוהוּ יְהוָה)。英語は The LORD is good.

●主のトーヴを信じる者は**将来必ず幸い(トーヴ)**を得ることができることを、「人称なき存在」は強調しています。そのための条件は以下の三つです。

- (1) 「**待ち望む**」 「カーヴァー」(קָוָה) 神の善を待ち望む
- (2) 「**求める**(尋ね求める)」 . . . 「ダーラッシュ」(דָּרַשׁ) 神のご計画と目的を知る
- (3) 「**静まる**(つぶやかない)」 . . . 「ダーマム」(דָּמַם) 沈黙することによる知恵

今回のまとめ

● 創世記1章2節の「地は茫漠として何もなく」というイメージを理解するのは難しいです。しかし「哀歌」にそれが表されています。今回学んだように、イスラエルが歴史の中で経験した事実が土台となっているのです。人間が造られる前に何があったのかが記されているわけではありません。

● 創世記1章の人間の創造は完成された神の似姿としての人間です。しかもこれは終わりの日におけるメシア王国での人間の姿です。そこで、イスラエルに与えられた神の約束は実現し、彼らに与えられた使命が完成されるのです。それまでの経緯のアウトラインが創世記1章3節から語られていくのです。

● 聖書は徹頭徹尾、**イスラエルを基軸として展開される神のストーリー**なのです。このことは聖書を理解する上でとても重要な視点と言えます。私たちの神は「アブラハム・イサク・ヤコブの神」であり、その神は「アブラハム・ダビデ・イエシュア」が上ったエルサレムを中心として、地の回復を繰り広げられるのです。